

『美しい深海と不細工な魚』

深く海に飛び込んだ。

塩水の痛みが次第になくなると、口から出る空気も減り、鼓動が停止して……私は初めて酸素の届かなくなった瞳を海中で見開いた。

小さい頃、見てみたい魚がいた。魚は世界で最も醜い魚と言われ、自分の顔にコンプレックスを持っていた私にとっては、心の友のような存在だった。水族館などの作られた空間ではない。この瞳で、魚が実際にどう生きているのかが見たかった。

生命の順応力により、微生物ほどのわずかな光のかけらが、視覚で無意識につかみ取られる。最初は真っ暗で何も見えなかった海の底が、数秒経つと慣れてくる。

まだ誰も見たことのない深海の景色が、腐敗の進む私の瞳に美しく流れ込んだ。

海色に光るクラゲ、毒々しい黄緑色の海藻、読めない文字が書かれた古い石板、体の八割ほどが金の目でできた魚……。見えるすべてに確証は持てないが、それらは求めていた場所へやってきたことの証明となった。

あ、見つけた。

図鑑とは少し違う姿で彼はいた。その姿は、やはり不細工だった。

口がガマガチ財布のように大きく横に伸び、目はまわりの皮膚に圧迫され飛び出している。鱗も闇に濁っているし、他の生き物みたいに泳ぎもしない。ぬぼーっと地面からちよつと離れたところにただ浮いているだけ。

私は彼が図鑑の通りだった落胆と、自分のちつぽけな願いに対するある種の安心と、二つの感情をもらった。

ほんと、どうしようもない人生だった。つくづく思う。

しかし、それを彼に伝えようとすると、勢いよく私の前までやってきた。速く泳げるなんて知らなかったので驚いた。

怒ったような顔で私を見ってくる。真剣なまなざしに、彼が食糧の少ないこの深海で、それでも生きるために自身の体を今のように変容させたのを思い出した。

ごめんね。君は、頑張っているんだよね。そう。私も、そうであったかったの。

水中のはずだが、私の目から水泡が浮いていく。彼はそれを見て汚く笑った。その表情はこの美しき深海と同化しているように思えた。

そつと、彼の唇に触れる。

美しい深海と不細工な魚

2025年3月13日 執筆

著者 やさか八坂 零

掲載 芸術の星座
